-上-
パークゴルフ昔話

~パークゴルフ誕生20年~

パークゴルフの生まれた幕別町の広報紙で、パークゴルフが産声をあげた20年前の様子がパークゴルフ昔話として掲載されました。「あの頃は~」と懐かしむ方もいれば、初めて知るPG誕生の秘話に興味を持たれた方もいることでしょう。掲載内容を一部抜粋・編集して紙面にて紹介します。

『パークゴルフの原点に今一度立ち戻ろう』

昭和58年5月幕別町教育委員会(当時は町民会館の一室に事務所がありました)。パークゴルフの歴史は教育部長・前原懿さん(現在のNPO国際パークゴルフ協会理事長)の一言に始まります。

「コミュニティスポーツとして何かおもしろいスポーツはないだろうか?」この問いに対して、当時の社会体育係の橋本正司係長と羽麿知成主査が前原さんに見せたのが昭和57年に鳥取県の泊村で考案されたニュースポーツ「グランドゴルフ」でした。

◆◇◆

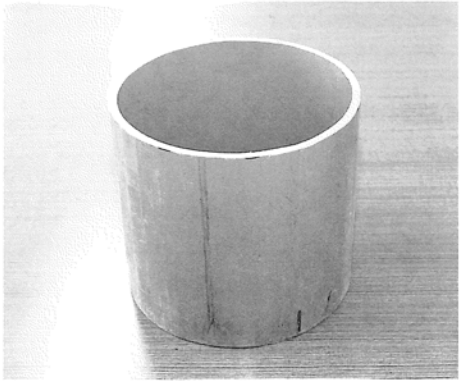
着目しなければならないのは、前原さんの発言にあるコミュニティスポーツとしてということです。コミュニティスポーツとは何かということが問題になりますが、現代用語の基礎知識によりますと【スポーツ本来の持つ連帯感を地域社会と重ねて楽しもうとすること】とあります。地域社会が一緒になるということは、社会としての最小単位である『**家族**』がその基本、パークゴルフには基本として**家族**があることを忘れてはならないと思います。

◆◇◆

次に場所ですが、グランドゴルフは本来、土のグランドで行われるものであり、前原さんいわく「地面の上でボールを転がすだけでさほど面白くない」と言うことで、グランドから芝生へとゴルフに近い爽快感を得る方法はないかと思案していたそうです。そして旧町営球場から帰る途中の運動公園が突然ゴルフ場に見えたということ。それとせっかく整備した公園があまり利用されていないということに着目したわけです。

◆◇◆

当時の公園面積は、町民(当時の幕別町の人口は21000人)一人当たり50㎡(平成12年4月は80㎡)でした。しかし、当時は公園で人影を見るのはまれでした。人が公園で遊んでいるのではなく、公園が遊んでいるという状態だったのです。それで公園をコースとして利用しようとうことになったわけです。そして、前原さんは当時の公園管理者である三井さん(現・役場建設部長)に相談したのです。このことは高い経費をかけた公園でありながら利用者が少ないというやりきれなさに苦しんでいた三井さんと前原さんの波長がピーンと合致した瞬間でもありました。



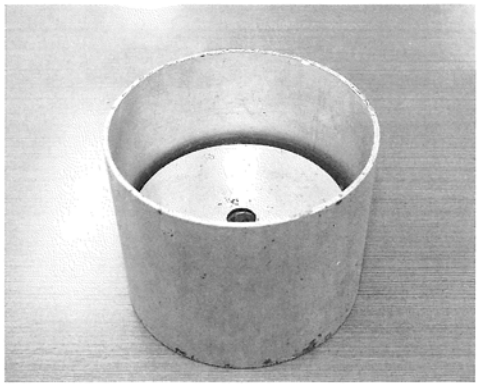
塩ビ管を利用した当時のカップ

◆◇◆

こうして、1983年(昭和58年)に7ホール、翌年5月14ホールを作り早くも11月には運動公園を会場に14ホールで全町大会が開催されています。しかし、当然、用具はグランドゴルフの用具でプレーしていたのです。

しかし本物のゴルフに近い、"爽快感"を求めてという点はまだ達成されていませんでした。当初ホールには塩化ビニールで作られた直径20㎝ほどの通称『塩ビ管』を使用していました。1985年(昭和60年)、三井さんの提案により、ゴルフで使っているカップと同じものを作ろうということになりました。しかし、それはパークゴルフを本物のゴルフの領域に近づけるとうことではなく、ボールがカップに入ったときに出る「カラーン」という音をパークゴルフにも与えたいということでした。

(48号へつづく)



今使用されているカップ

-中-

パークゴルフ昔話

幕別町役場広報より抜粋

パークゴルフ誕生へ

（先号の続き）さて、パークゴルフが名前を変えて現在に至っているということを皆さんご存知でしょうか。古くからプレーしている方はご存知でしょう。実は、１９８６年（昭和61年）３月に「パークゴルフ」という名前が新たにつきました。それまでは「グランドゴルフ」でした。公園の芝生にコースを作り、楽しむゴルフのようなスポーツ。生まれてから３年が経ち、幕別独自のオリジナルスポーツとして順調に発展してきている。だから独自の名前を付けようということで「パークゴルフ」という名前がついたのです。

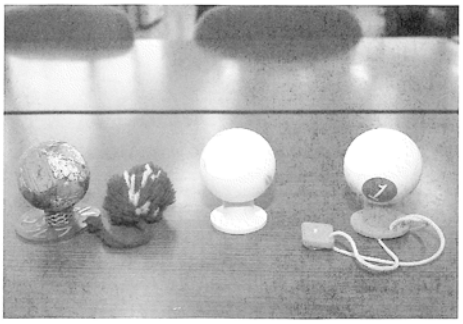
◆◇◆

用具についてはどういう変遷をたどったのでしょうか。当初、グランドゴルフの用具を使用していたので、パークゴルフの使用にはなかなか耐え切れず、痛みも激しいものがありました。各自、打面にゴム板を貼ったり、ボールにテープを巻きつけたり工夫をしていました。

しかし、こうした現実に対して指をくわえていたわけではありません。

１９８３年に教育委員会から新田ベニヤ工業株式会社（現・ニッタクス）にクラブ等の製作依頼をしており、３年後の１９８６年９月に道産のカバ材を使ったスティックとボールが完成し、翌１９８７年に市販を開始しています。スティック７作目、ボール５個の試作を経ての完成でした。

最初に使用したクラブ。
表面にゴム板を貼っています。



左からボールの古い順

そして、現在に至るわけですが、形状は今の形に、名称は「クラブ」に変わり、ボールは樹脂に変更になったのは、皆さんご存知のとおりです。ティについても輪切りにしたビニールマットにビニールホースをゴムボンドでつけた形から、発展し、現在の形になったわけです。

『パークゴルフの原点に今一度立ち戻ろう』

パークゴルフの１ホールの距離について最長１００ｍという決まりがあるのはご存知でしょうか。

１９９３年３月の『公認コース・認定の基準』の３・コースレイアウトと造成(4)に１ホールの距離は最長１００ｍ以内とする。(5)１コース（18ホール）の距離は、７００ｍ以上１０００ｍ位までとする。（ただし９ホール５００ｍ以内とする）とあります。

この目的は、飛ばしすぎの危険防止と、年齢や男女差などによるハンディキャップ（不利な条件）を最小限にとどめるためのものです。１００ｍの距離は１打では誰も届かず、２打なら誰でもホールに近づくことができる距離です。こん身の力をこめて打つ最初の１打。爽快感を味わうことのできる瞬間です。２打目は技術勝負の微妙な「寄せ」が勝負を分けます。

奥より古い順にクラブを並べてみました

つつじコース

この気持ちは、はらっぱコースのＡコース８番（１００ｍ）、Ｂコース４番（１００ｍ）でサーモンコースのＡコース５番（98ｍ）、Ｂコース９番（99ｍ）で経験した事があるはずです。若者や高齢者、女性や子供も一緒に楽しめる３世代スポーツとしてのパークゴルフの真骨頂がここにあるわけです。

（49号へ続く）

次号では最終回として、国際パークゴルフ協会設立について掲載いたします。

-下- パークゴルフ昔話

幕別町役場広報より抜粋

『パークゴルフの原点に今一度立ち戻ろう』

（先月号の続き）　次は、パークゴルフ国際協会設立についてです。

1986年9月に「幕別町パークゴルフ協会」が設立しています。1986年3月に開催されたパークゴルフ振興会議の中で国際協会についての話題が初めて出たとされています。1987年の1月に開催された教育委員会と幕別町パークゴルフ協会による「パークゴルフ懇談会」の中で初めてパークゴルフ国際協会について正式に議題として協議されています。同年2月・4月の幕別町パークゴルフ協会の企画部の協議を経て6月のパークゴルフ振興会議（平成に入り発展的解散）の中で国際協会設立に向けて具体的な事項が話し合われています。

更に幕別町パークゴルフ協会企画部の中で8月22日に国際パークゴルフ協会の設立総会をすることが決定されたのです。

こうして、8月22日国民宿舎幕別温泉ホテル（現ホテル緑館）で設立総会が開催されています。

最後に設立総会での「国際パークゴルフ協会設立までの経過報告をそのまま載せたいと思います。この文章をご覧いただければ、パークゴルフをこの世に送り出した者たちの「思い」が理解いただけるものと思います。

国際パークゴルフ協会設立総会

国際パークゴルフ協会設立までの経過報告

パークゴルフは昭和58年に、グランドゴルフ（これは、その名のとおり、学校のグランドなどの土の上でするゲームであります）をアレンジして幕別町で生まれました。

そもそもの発想は「公園をもっと楽しく・町民の遊び場にしよう」そんなに広い公園でなくてもゴルフの気分は味わえる、そんなことでありました。そして、子どもから高齢の人までが楽しめるコミュニティスポーツとして成長をしてまいりました。こんな楽しいスポーツを、ひとり幕別町民だけが楽しんでいいのだろうか、そんな声が愛好者の中から沸き起こり、積極的に昨年から北海道内をはじめ道外にも普及を図って参りました。

その間、地元企業による用具の開発、ルールの統一、標準コースの設定、町協会の設立などの条件の整備を進めてきたところであります。

国際パークゴルフ協会の設立につきましては、町内の大会や十勝大会、全道大会などを幕別町で開催してきた経験から、こんな面白いスポーツが外国にも普及できたらと、そんな夢のような話がきっかけで、それでは取りあえず十勝管内に住む外国人に呼びかけて、国際パークゴルフ大会をやってみようというところまで発展し、春以来その準備を進めてきたわけであります。

普及を図ってきた成果としてのコースの造成も幕別町の7コースをはじめ、十勝管内20コース（造成中を含む）、道内（十勝管外）10コース、道外4コース、合計41コースとなり、愛好者の数もおよそ3000人を数えるところまで発展している現状を踏まえ、国際大会を契機として近い将来、外国にもぜひパークゴルフの普及を図り、ささやかな国際親善を目的とした国際パークゴルフ協会の設立を計画してきたところであります。

・・・（中略）・・・

大事なことは、このスポーツは競技スポーツではなく、コミュニティスポーツあるいはレクレーションスポーツであること、そして本日設立される協会は、生まれたての赤ちゃんであり、これから皆さんの手によって育まれるものであるということであります。

つつじコース